

---

# 異世界影日記

毒弦竹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界影日記

### 【Nコード】

N2298BA

### 【作者名】

毒弦竹

### 【あらすじ】

テンプレ通りのような事件を経て、浪人生が異世界に転生。転生先は影族という雑魚魔物。魔物や魔族が人間のよう集落を作る世界ではのぼのと毎日を過ごす主人公の日常を、ゆったりと楽しんでください。

## 影日記その1

一日目。

異世界に転生した。

経緯を簡単に説明すると。

- ・大学の合格発表、志望校に落ち失意の内に帰宅。
- ・道中トラックに跳ねられ死亡。
- ・それは神さまのミス。なんか剣と魔法の異世界に転生させてくれるらしい。

はいはい、テンプレテンプレと一笑の内に切り捨てられそうだが事実だから仕方ない。正直助かった感はある。実は俺三浪目で、今回受からなければ家を追い出されることになっていたのだ。バイトもしてなく貯金の無い俺が家を追い出されたら遠くない未来死んでいただろう。だからどうせ死ぬなら強くてニューゲームする方が良いい。記憶の引き継ぎは、異世界であれ大きなアドバンテージになるだろう。ソースはネット小説。ふふ、俺も主人公デビューか。燃えてきた！

神さまミスしてくれてありがとう！

新しい両親のもと、俺は俺らしく生きていこうと思う。

……ただ、なんか両親黒くないか？

黒人というレベルじゃなくて、そう例えるならドラクエのシャドームイみたいなの……。ペラッペラだよ、ペラッペラ。

二日目。

俺の転生先が分かった。影族という魔物の一種のようだ。両親の会話を聞いて把握した。何故か分からんが、言葉はなんとなく理解できた。ご都合主義？ いやいや、神さまの粋な計らいとしておう。

それより問題は魔物に転生したという点だ。なんというか、てっきり人間だと思っていただけけれど。

……………。

まあ、生まれてしまったものは仕方ない。とりあえず今の所は流されるままにしておく。幸いにも影族は生まれてから三日で赤子から子供になるらしい。今の俺の姿はサッカーボールくらいの影の塊なのだが、これが両親みたいにペラッペラな体になるようだ。明日が楽しみである。自分で歩き回れる的な意味で。うむう、なんとも不思議な種族だろうか。

それより母親はさっきからミルクを俺の体にかけているのだが何がしたいのだろうか。

……………まさか授乳とは言うまいな？

三日目。

ついに体が成長した。両親のようにペラッペラな体に。足はなく幽霊のようにふよふよと浮かべる。嬉しいのだけど嬉しくないという微妙な気持ちだ。

とりあえず現状把握のために両親と会話してみた。すると、彼らの知能レベルは前世の人間並にあったことが判明した。おお、良かった。獣レベルだったらどうしようかと思っていたし。まあ昨日会話しているのを聞いていたから、少なくともそれは無いと考えていたけど。

さておき、両親との初コンタクトで俺は名を授かった。「カゲロウ」……縁起でもないネーミングだった。両親は俺を七日で死なすつもりだろうか？

思わず頬がひきつった俺を誰も責められやしないだろう。頬がどこにあるかは別として。

そうそう、言葉が理解できる理由が判明した。なんでも影族は念話なんてもので会話をするらしく、それで俺も理解できたのだとか。影族、チートなのか？

今日一日は両親と会話をして過ごした。

七日目。

ここの世界観把握に四日を費やした。両親に聞いたり、外に出たりして情報を集めた所、

- ・ 剣と魔法の異世界である。
- ・ 人間と魔物、魔族は敵対している。
- ・ 勇者もいるし魔王もいる。
- ・ 魔物や魔族も人間のように集落を作っている。
- ・ 現在人間との大掛かりな戦争は一時休戦中。十年くらい大規模な戦争は起きず、魔の森とかいう広大な森を国境ににらみ合いが続いている。

つまり、今は戦時中って訳ね。でも休戦中だから当面は命の危険はなし、と。

安心したけど安心できない。あまり争いごとに巻き込まれたくないなあなんて思ってみたり。徴兵されない限りは大丈夫だろう……

多分。

都会はピリピリしているのだろうか、俺の生まれた村はど田舎。ほのぼのとした空気が流れている。住んでいるのも影族だけじゃなく、スライム、アンデッド、オーク……例をあげると切りが無い。多民族国家？ みたいなものだ。

因みに魔物と魔族の違いは、「格」の違いらしい。なんていうの？ 存在感が違う？ ラディッツと初めて対峙した悟空の気持ちといえは分かるか。コイツは、俺とは違うみたいだ。

つまり、格イコール「畏怖」なのだ。

魔族が貴族で、魔物が平民って認識で大丈夫だろう。

そっぴや、俺の家の隣が人狼族って魔族のお宅何だよ。両親なんて隣から音が聞こえてくる度に体を震わせるもん。

えっ、俺は怯えないのかだって？

前世がオタク気質だった俺は、彼らを遠目から見るとき怖いというより興味深いと思った。近寄り難いなーとは感じたけど。だって犬耳だよ、犬耳。かーいいじゃん。

聞いた所によると、この世界における影族の立場は低いから彼らと関わることは無いんだろうけど。ちよっぴり残念。

八日目。

家の手伝いで近くの川に水を汲みに行った。水の入った桶を持ち歩くのは一苦労。俺の体が小さいってのもあるが、影族は悲しいことに筋力が無い。だって影だし。異世界モノでお馴染みの無双がでないのは残念だ。そして、記憶を引き継いでも何にも出来ないことが分かった。肥料の作り方？ 調味料の合成？ 内政チート？

無理無理、俺ただの浪人生。

平凡にこの村で生きていくんだろうな……。うん、それもアリだな。

えっちらほっちらと休憩をはさみながら家に帰ろうと、ふよふよと浮いていると、切り株につまらなさそうに足をぶらぶらさせている幼女を発見した。

犬耳……。ああ、お隣の娘さんか。しかし何故にこんな場所に。あ、目が合った。とりあえず頭を下げしてみると、幼女もちょこんと頭を下げてくれた。

可愛らしい、けどお近づきになれないのが残念だ。そのまま俺は家に帰った。

九日目。

今日も両親の手伝いで水汲み。帰り道でまた幼女にあつたので頭を下げておく。

十日目。

今日は手伝いをしなくて良いと言われたので、広場に遊びに行く。村の広場には沢山の子供が集まっていた。思い思いの遊びで盛り上がっていて、ちょっと輪に入りにくい。コミュニケーション能力が欲しいなー切実に。

手持ち無沙汰に佇んでいると、なにかが体当たった。視線を下げると液体状の塊が俺の体に体当たりしている。どうやらスライムのようだ。しかし、なぜスライムに体当たりされているのか？腕組みしながら考えてみると、スライムはぴきーと声を出した。なにがしたいのか分からない。

影族の念話を使って「遊びたいの？」とたずねてみれば、体から一本触手を出して器用に丸を作った。……なにコレ面白い。触手を触ってみると、ひんやりと冷たかった。さわさわとスライムの体を撫でてみる。ぴきくと嬉しそうに鳴いた。……猫みたいだ。

一日中スライムをこねくり回して遊んだ。本人は嫌がっていなかったから良しとする。

友人、ゲットだぜ。

十一日目。

お手伝いしようとしたが、今日は遅く起きてしまったため先に親がやっしまっていた。

することが無くなった俺は広場に行き、昨日のスライムと戯れることにした。

ぴきーぴきーと鳴くスライムに癒されて撫でていると、コロコロとボールが転がってきた。

それを拾って、持ち主の蝶の羽が生えた少年に返してあげる。恐らく妖精だろう。少年はありがとうと礼を言くと、俺たちをボール遊びに誘ってきた。俺はスライムを見ると、触手を出して丸サイン許可が出たので、少年のグループと一緒にボール遊びをした。ボール遊びなんて久しぶりだろうか。

友人が増えた。この調子なら友達百人できるかね？

十二日目。

今日は久しぶりに両親の手伝い。川で水を汲む。



帰り道、あの犬耳少女がやっぱり切り株に腰掛けてつまらなさそうにしていた。……いつもなにやってんだ？ 話しかけようとしたが、俺は現在お手伝いの真っ最中なので断念。

目があったので一応礼だけして帰ろうとしたが呼び止められた。

「ね、ねえ！ お話ししない？」

なんと。お話ししたいのは山々だが、水がないと両親は困ってしまふ。影族の食べ物の水なのだ。俺は少し悩んでから断ろうとしたが、あんな泣きそうな目で見られたらしょうがない。少女のお話につきあうことにした。決してキユンときた訳ではない。キユンときた訳じゃないんだからね！

随分と長く話し込んでしまった。太陽が頭の上に登っている。朝早くからだだったから、四時間くらいか？ 少女の話はとどまることを知らず、一向に終わる気配が無い。埒があかないので俺が帰る旨を伝えると、少女はじわつと涙目になった。

「やだ」

でも、水を両親に届けないと。

「やだやだ！」

「ごねはじめて、今にも泣き出しそうだったのを必死に宥め明後日遊ぶことを約束して俺は家に戻る。」

家に帰った俺が見たのは、干からびかけた両親の姿だった。しなびたレタスのようになっていている両親に、慌てて水をかけて復活させるとしこたま怒られた。

すまん、父母。幼女の涙には勝てなかったんだ、俺は。

## 影日記その2

十四日目。

約束通り幼女のもとへとやってきた。

幼女は俺を見つけるなりピアと花が咲いたような笑みを浮かべて駆け寄ってくる。嬉しがっているのか、犬のように尾をパタパタと震わせている。……和んだ。

「今日はねこれで遊ぼ？」

渡されたのはお人形さんだった。俺が手にしているのは猫耳のお人形で幼女のは犬耳だ。うむう……？ リカちゃん人形みたいなものだろうか。しかし、俺はお人形遊びなんてしたことないぞよ。ガンプラとかは作ったことあるけど。まあ、何事も経験だ。幼女に合わせて俺も人形の手足を動かしたり、人形になりきってお喋りした。なるほど、おままごとの延長みたいなものね。

日が暮れるまで一緒に遊び、俺は幼女と三日に一度必ず遊ぶ約束を取り付けるのであった。

十五日目。

今日は疲れる一日だった。なんつーか……子供って元気よな。

広場に遊びに行くと、スライムと戯れその後妖精たちと遊ぶっていうのが最近の定番だ。お決まりのメンバー以外にも他の子たちとも仲良くなつて馴染んできたので、ふと前世の子供時代に体験した遊びを教えてみることにした。

缶蹴り、鬼ごっこ、かくれんぼ、だるまさんがころんだ……などなど。結果は好評、教えた遊びを試してみることになり時間を忘れるほど熱中した。ちよっちキツイ。カゲロウの中の人は、体はともかく精神は大人に近いので子供のノリに合わせるのが大変だ。みんな無邪気で可愛いけどね。んで、柄にもなく本気で遊んだからか体の節々が痛む。明日は筋肉痛だなー筋肉ないけど。

十六日目。

筋肉痛にならなかった。影族サイコー。  
特筆することはあまりない。

十七日目。

お手伝いで水を運んでから幼女とお話。毎度ながらよく喋るなー。  
女の子って会話好きなのはどの世界も変わらないのね。

十八日目。

衝撃的な事実発覚。

魔法がつかえない。

影族には魔力が備わって無いらしい。涙目である。  
カゲロウはメラを唱えた。しかしMPが足りない！　なんてインフォメーションが頭の中に鳴り響きそうだ。

え、ちよ、どうすんの？　筋力も無ければ魔力もないなんてひ弱過ぎでしょ。もし戦いが起きたら即お陀仏じゃん。

そう尋ねると、父曰わく影族にはユニークスキルが備わっている

らしい。そのスキルとは……「影分身」。影だけにつてか？ やかましい。

ノリつつこみを心の中でしつつ、父の説明を聞くと、影分身は自分と同じ用な分身を何体も作り出すことができるらしい。試しに見せてもらうと、なるほど確かに父が四人に分身した。父の最大分身数は四、影族の一般的な数値だとか。

父にやり方を習いつつ、俺も挑戦。自分の何かが離れていく間隔と共に、少し色の薄い俺がでーんと登場した。おー、やるじゃん俺分身俺と腕相撲してみる。結果は勝った。あれ？ 力は同じくらいじゃないの？

父曰わく、完全な分身体ではないらしい。これは練習あるのみだとか。面白そうなので毎日寝る前に練習することにしよう。

二十五日目。

転生してから日が過ぎた。俺は相変わらずほのぼのとした村でのほほんと生きている。

手伝い 幼女と会話 広間 スライムたちと遊ぶ 帰宅 影分身の練習、つてのが俺の一日のサイクルになった。

幼女は相変わらずお喋り好きだし、スライムは相変わらず気持ちいい。が、影分身に関しては成長していない。うむむ……日進月歩進しかないか。楽は出来ないのかー。

二十六日。

幼女と会話している時にふと思った。あれ……？ 俺、この世界に来て美味しいもの食べてなくな……？

思い返すは我が家の食卓。朝、水。昼、水。夜、水。……一ヶ月

水生活！？ どの黄金伝説だ！

確かに影族は水だけで生きていけるけれども、元人間としてこの食事情はいただけない。つか、幼女の晩飯の話をしだすまで気がつかなかったなんて呆れてしまう。

そこで、俺は幼女に頼んでこの辺に美味しい食べ物がないか聞いてみることにした。

「この辺りにある美味しいもの？ うーん、知らないよ」

またまた、お嬢さんここにいるの長いんでしょう？

「そーだけど……」

幼女は暫くうんうん唸っていると、何かを思い出したような表情になった。それで、兎のように駆け出してある果物をもって帰ってきた。

ほら、コイツを見てみるとばかりにその果物を差し出す幼女に、俺はす、すごく毒々しいですと感想を抱いた。

見た目は桃のようだが、色がおかしい。紫ベースで黄色い斑点が浮かび上がっている……危険色じゃね？

ハッ！ 待てよ、ここは異世界だ。元の世界の常識を持ち込むべきじゃ無いだろう。なんと巧妙な罠だろうか。異世界め、俺の常識を逆手にとるとはやってくれる。だが、残念だったな。この俺の観察眼を持ってみれば、この程度の推測は容易だ。フツフツ、甘いな異世界。俺の勝ちだぜ？

幼女から果物を受け取り口に運んだ。

ふうむ、まるやかでどことなく深みがあり……コパッ。

二七日目。

昨日は酷い目にあつた。やっぱりあれ毒だったのね……四時間くらい気絶していたっばい。起きたら涙やら鼻水やらで顔をぐしょぐしょにした幼女が泣きついていたので宥めるのに苦労した。しかも、あの毒果物は悪魔の実ですら無かつたので俺がゴム人間になることは無かつた。完全な無駄気絶である。

教訓、その辺のものを拾い食いしない。

今日は昨日の疲れを癒すために療養。

でも、俺の食生活改善はこれからも続けるぜ？

三十日目。

姉さん、事件です。

あ、ありのままに起こつたことを話すぜ？ 以下略。

広場につくと、オークっぽい豚鼻の少年が俺に決闘を申し込んできた。理由は新参者のくせに生意気だ、らしい。い、意味が分からねえ。

他の子供たちはみんな怯えている。そんなに怖いのか？ この豚鼻は。

妖精の少年曰わく、豚鼻はここら一带を占めるガキ大将で腕っ節が強く、気に入らないことがあると癩癩を起こして乱暴するらしい。で、みんなに嫌われているけどみんな何も言えないんだと。殴られるのが怖いから。……アイツはジャイアンか。体型は似てるけどさ。あ、豚鼻の取り巻きにスネ夫っぽいのもいる。じゃあ、豚鼻はジャイアンだな、決定。

ジャイアンは「決闘は二日後だ、首を洗って待ってる」とか「土

下座して俺の子分になれば許してやる」だとか言っていた。典型的ないじめっこだな。いじめ良くない。とりあえず小石をぶつけてみた。

今すぐつかみかかってきそうなジャイアンに、決闘は二日後だろー卑怯な真似するのかーと念話で伝えてみた所、ジャイアンはぐつとこらえて「絶対に許さない」なんて吐き捨てて、取り巻きどもと姿を消した。

絶対に許さないを言えるのは少女アニメの主人公だけだろ、お前みたいな豚鼻が言うんじゃない！俺の方が絶対に許さないわボケ！

なんて憤っていると、スライムが心配そうに声をかけてきたので撫でておく。

友人になった妖精さんたちや広場の子供たちも口々に謝るように言ってくるが、子供の喧嘩なんだから大丈夫でしょ。

え？ アイツ、木の幹を拳で突き破った？ 嘘でしょ？ なに、本当？

.....  
.....  
.....  
.....

早まったかもしれん。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2298ba/>

---

異世界影日記

2012年1月6日18時47分発行